

中国語における外来語について

安 本 武 正*

Foreign words used in Chinese

Takemasa YASUMOTO

一

過去、中国語における外来語について、中国では色々と議論があった。そのおもだった議論を拾って見ると、西洋諸国の人名地名の音訳では、漢字を廃止して併音文字化すべきだというもの、意識語の中では、その来源を日本語とするものに、その信憑性を問うもの、また意識の科学技術用語では、その不統一さを問題にするものなど、議論百出と言っても過言ではない。しかし、このような議論を経てきたにも拘わらず、なお未解決の問題が相当あろう。例えば、近年登場した「撤切爾」(サッチャー)、「軟件」(ソフトウェア)などの外来語、または再び登場した「可口可樂」(コカ・コーラ)、或いは「拷貝」(コピー)などの外来語を見ると、一層問題の深さを感じるものである。

小文では、中国語の外来語を音訳、意識、音義兼訳の三つのパターンに分けて、上に述べた問題を中心に、筆者の考えを述べてみたい。

二

音訳とは、中国語の漢字の音声をもって、外国語のなまの音声そのものに当てる方法である。この方法は、西洋諸国の人名地名の音訳に多いが、漢字を唯一の文字とする中国語ではやむをえない処置であろう。だが当初この音訳には一つの問題があった。王仲聞氏によれば、Дихонов というソ連人の名前に対して、「吉洪諾

夫」、「鉄霍諾夫」、「吉霍諾夫」の三つの書き方が存在していたと述べている。(『統一譯名的迫切需要』中国語文 1953 年 8 月号)。また、陸志韋氏の述べるところでは、Донбасс というソ連の地名には、「頓巴斯」、「頓涅茨」の二つの書き方があったと言っている(『外国人地名譯音統一問題』中国語文 1953 年 8 月号)。このように使用する漢字が不統一な現象が起っていた。そこで、人名地名の音訳には、漢字を統一せよと要求が出された。また同時に、この Дихонов と中国語の Tiehuonuofu (鉄霍諾夫)、Донбасс と中国語の Dunnieci (頓涅茨) などと、音声を比較してみると、あまりにも掛け離れていて、音訳の不正確さも問題になった。

そんな中で、併音文字が発表されると、この人名地名の音訳に対し、漢字廃止論が起ってきた。曾世英氏はこの事について、「非漢語地名以往通過漢字來翻譯；漢語併音方案公布以後，又可以通過漢語併音字母來翻譯」(『為地名翻譯的規範化和革新而歡呼』中国語文 1959 年 12 月号)、つまり簡単に言うならば、この併音文字の発表によって、西洋諸国などの地名には併音文字を使えると述べている。また、曾氏のこの文章によれば、「地名譯音委員會」が『地名翻譯原則草案四種』を発表したとも述べている。(『文字改革』1959 年第 19 期に登載とされているが、筆者未見)しかし、この併音文字化の方向をもった『草案』が発表されてから、すでに二十数年経ているが、いまだ併音文字が外来語に使用されてはいない。わずかに、最近の「中華人民共和國地圖」一枚に併音文字で書かれたものを見ることが、これも多分外国人向けのサービスではな

昭和 57 年 11 月 18 日受理

* 一般教育部講師